

学び舎通信

箱根駅伝から学ぶ

一年生最後の学期が始まりました。今年もよろしくお祈いします。みなさんは、冬休みをどう過ごしましたか。何か新学期に向けて、思いを新たにす出来事はありましたか。

私には箱根駅伝（東京箱根間往復大学駅伝競走）が思いを新たにしてくれるものでした。1月2日、3日の2日間にわたって開催された今年の箱根駅伝は、4連覇を目指す青山学院大学に加えて、出雲駅伝（出雲全日本大学選抜駅伝競走）を制した東海大学、全日本大学駅伝（全日本大学駅伝対校選手権大会）を制した神奈川大学の「大学3強」の争いになるという前評判でした。

しかし、往路では東洋大学が意地を見せて往路優勝、復路では6区で逆転した青山学院大学が大差をつけて逃げ切り、見事箱根駅伝4連覇を達成しました。残りの2強は、東海大学が5位、神奈川大学が14位という結果でした。

この箱根駅伝は、他の駅伝大会とは違うところがあります。それは主催者側が用意するたすきではなく、出場する大学が用意する伝統のたすきをリレーしていくというものです。箱根駅伝だけに使用するたすきを持つ大学もあるそうです。代々の部員が箱根駅伝を走った思い、歴史がこめられているたすきをリレーしていくのです。

十人の選手で200キロを越える区間を走るこの駅伝で、これまでも多くのドラマが生まれました。感動の初優勝、逆転優勝。エースの想定外の失速。無情の繰り上げスタート。多くの場面が私の目に焼き付いています。

青山学院大学の原晋（はらすすむ）監督は、大学時代、箱根駅伝に出場した経験はありません。また、実業団での陸上選手時代に結果を残すこともできませんでした。

不本意な形で競技生活を終えた原監督に、人としての成長を与えてくれたのは、引退後に配属された部署でのビジネスマンとしての日々だったそうです。人はどんなところで成長の機会を与えるかわかりません。

原監督は、『しんどくなくても、あいつのためにタスキを渡したいという気持ちがあれば、もうひと踏ん張り利く』『成功体験を積み重ねることで前進することができる』などと語っています。

みなさんにとっても、あいつのために頑張る、あいつを笑顔にするという気持ちが学校生活を充実させるのではないのでしょうか。



当たり前のことを当たり前できるように

3学期の始業式で、残り登校する日数についての話がありました。19日現在で、みなさんが登校する日数は45日となりました。残り日数は少なくなりましたが、少しでもできることを増やしてほしいです。思いつくものを挙げてみますので、教えてください。

- ・× 放課中に次の授業の準備を整えている。
- ・× 席に座った状態で、始業のチャイムを聞くことができる。
- ・× 自分がされて嫌な思いをすることは、周りの人にしない。
- ・× 「ありがとう」「ごめん」を素直に言うことができる。
- ・× 学校生活や部活動で、後輩に背中語る先輩になる決意をもつ。

チャイムが鳴る前に、座るように促す先生たちの声かけが減っているのに気付いていますか。人に言われて動くことをいつまでも続けてはいけません。時計を見て、周りの様子を見て、動けるようになってほしいと願っています。「こんなことも任せてみたい」「まだまだいける」そんな会話が学年の先生の中からもっと聞こえてくると私もうれしいです。

（文責：水野 千広）